

2024年2月27日

2023年度 聖路加国際大学大学院 看護学研究科
修士論文

成人植込型左室補助人工心臓患者に対する看護師による終末期ケアのプロセス
End-of-Life Caring Process of Adult Patient with
Left Ventricular Assist Device from Nurse's Experience

21MN306

高橋 翔平

要旨

【目的】 植込型の左室補助人工心臓(Left Ventricular Assist Device:以下、LVAD)を装着した成人患者(以下、LVAD患者)に対する看護師による終末期ケアのプロセスを記述することである。

【方法】 研究デザインは半構造化面接法を用いた質的記述的研究である。研究対象者はLVAD患者の終末期ケアの経験が豊富な看護師を機縁法で選定した。インタビュー内容をもとに逐語録を作成し、修正版グランデッド・セオリー・アプローチを用いて分析し、LVAD患者に対する看護師による終末期ケアのプロセスを示した。分析の信頼性及び妥当性を高めるために、急性期看護領域の専門家と質的研究の専門家のスーパーバイズを受けた。尚、倫理的配慮として聖路加国際大学研究倫理委員会の承諾を得た上で実施した(承認番号22-A099)。

【結果】 植込み型補助人工心臓実施施設1施設に勤務する看護師5名を研究対象者とした。分析の結果、2カテゴリーと6サブカテゴリー、23概念を生成した(以下の【】はカテゴリーを指す)。LVAD患者の終末期ケアは、自己の心臓だけでは生命の維持が困難な中で、LVADという耐久性の高い機械的な循環補助により経過が長期化し、どこまで治療を続けるべきかという不確かな状況になる。その中でLVAD患者が苦しむ姿に看護師が直面しながらも、支援を続けることで感情的な重圧を抱え、自然な死に逆らうような最期に対して【動き続ける心臓へのもどかしさ】を感じていた。そして、看護師は患者の尊厳保護や苦痛軽減を図りながらも、予後予測が困難な中で生じやすい医療者の意見の相違や介護者の困惑に対処するようにコミュニケーションを重ね、穏やかな最期に向けて絶え間ない【最善の模索への奮闘】が交差するプロセスが明らかになった。

【結論】 LVAD患者の終末期は、経過の予測が困難になり長期化しやすい。最適な終末期ケアに向けては、LVAD患者と介護者の意向や価値観を尊重できるように医療者間で意見の統一を図り、多職種連携によりコミュニケーションを促進することが求められる。心臓移植を前提としないDTの拡大が予測されることから、LVAD患者が住み慣れた自宅や地域で最期を過ごせるように、地域医療の体制作りやLVAD管理に関する知識と経験のある医療者の育成が重要である。